

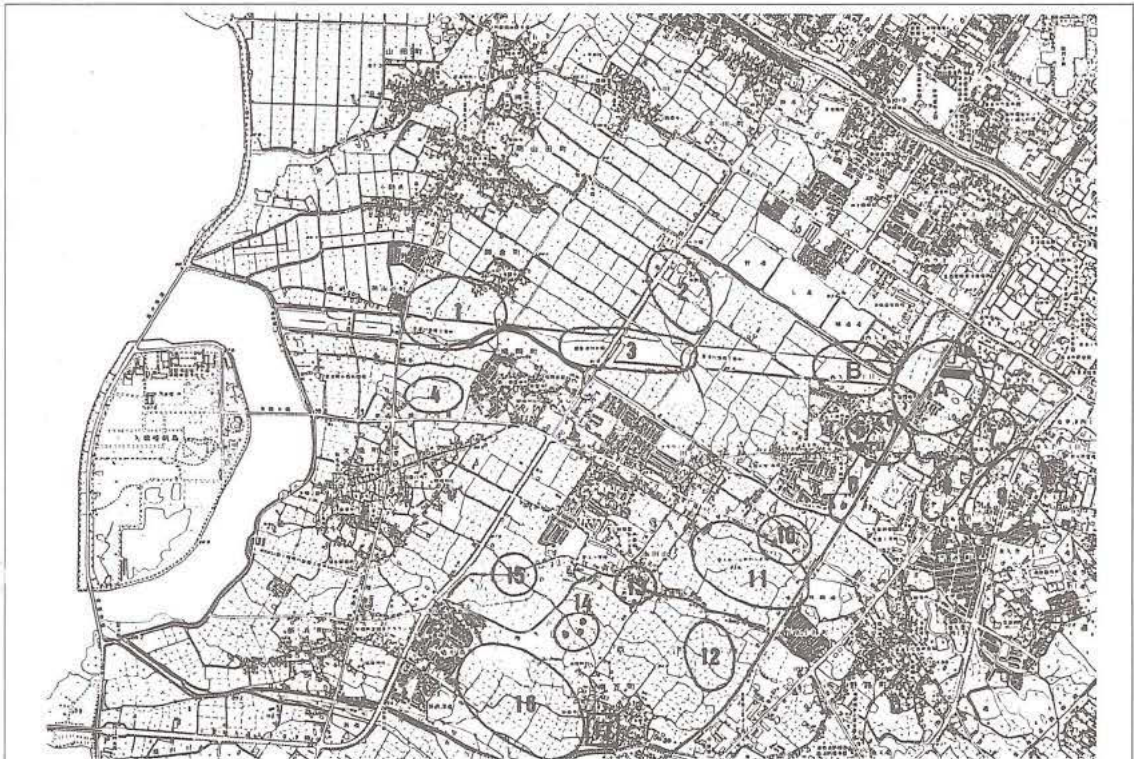
207. 草津市中畑遺跡出土

るつぽ ガラス埴塼をめぐる諸問題

1. はじめに

1991年9月9日、中畑遺跡の発掘調査において井戸内を調査中、高さ14cm程度の砲弾形をした遺物が出土した。外面をタタキ調整した須恵質のその遺物は、内

面には緑色の施釉をしたようなガラス質が付着していた。調査当初、類例も少なくこの性格は不明であったが、近年、奈良県明日香村の飛鳥池遺跡より同様の遺物が大量に出土し、ガラス埴塼であることが判明した。中畑遺跡の正式な調査報告書は調査の行程上、数年先になるために、今回ここに誌面を借りて中畑遺跡出土ガラス埴塼の紹介とガラス埴塼について若干の整理をおこないたい。



- | | | | |
|-----------|----------|-----------|----------|
| A 中畑遺跡 | B 谷遺跡 | | |
| 1 御倉遺跡 | 2 墓ノ町遺跡 | 3 襖遺跡 | 4 狭間遺跡 |
| 5 大塚遺跡 | 6 矢倉古墳群 | 7 南平遺跡 | 8 坊主東遺跡 |
| 9 矢倉口遺跡 | 10 片原遺跡 | 11 野路岡田遺跡 | 12 柳差古墳群 |
| 13 南田山古墳群 | 14 南笠古墳群 | 15 中ノ沢遺跡 | 16 西海道遺跡 |
| 17 笠寺廃寺 | | | |

中畑遺跡及び周辺遺跡位置図

2. ガラス埴塼とは？

「ガラス埴塼」とは、ガラスを溶解するための埴塼である。ガラス埴塼が最初に確認されたのは、奈良国立文化財研究所による平城京左京八条三坊（東市周辺東北地域）の東堀河の調査中である。以降、平城京内と石川県寺家遺跡で出土の報告があるが、平城京右京二条二坊十六坪で完形の埴塼1点が出土しているほかは、それぞれ数点ずつの破片でしか発見されていない。しかし、1991年奈良県飛鳥池遺跡より約90個体におよぶガラス埴塼が発見され、その全容が把握されるに至った。また、この調査では同時に埴塼に伴う蓋が存在することも確認されている。この項では、飛鳥池遺跡出土例を中心にガラス埴塼の形態・特徴を記していく。なお、ガラス埴塼の出土地は末尾の地名表を参照されたい。

ガラス埴塼は大粒の石英が大量にまじる粗い胎土で、全体の形状は砲弾形をなしている。底部先端は乳頭状に尖るものと丸く整える2種が存在する。器壁は厚く、外面は全体を斜格子タタキ調整をおこない、被熱を受けている。内面はなめらかな放物線を描き型で作られたと考えられる。内面に緑・赤褐・黄褐・乳白濁色のガラス釉が、薄いものは施釉程度に、厚いものはガラス質がべっとりとして付着している。内径でI（8.5cm）、II（6.5cm）、III（5.5cm）に分類でき、I・II類はさらに深さで13～8.4cm、9.2～6.4cmに分かれる。

埴塼に対応するものとして埴塼蓋がある。蓋は埴塼口縁の上ののるもので、埴塼口縁内にはまりこむものではない。埴塼蓋も石英が大量にまじる粗い胎土で、円盤状の笠部の上中央に隅丸長方形のつまみがつく。笠部およびつまみには斜格子タタキ調整を施し、笠部



中畑遺跡出土ガラス埴塼

の側縁を切り落とす。内側にはガラス釉が付着、埴塼口縁の痕跡が残る。蓋の径は13～7.5cmで、ほぼ埴塼の径に準じている。

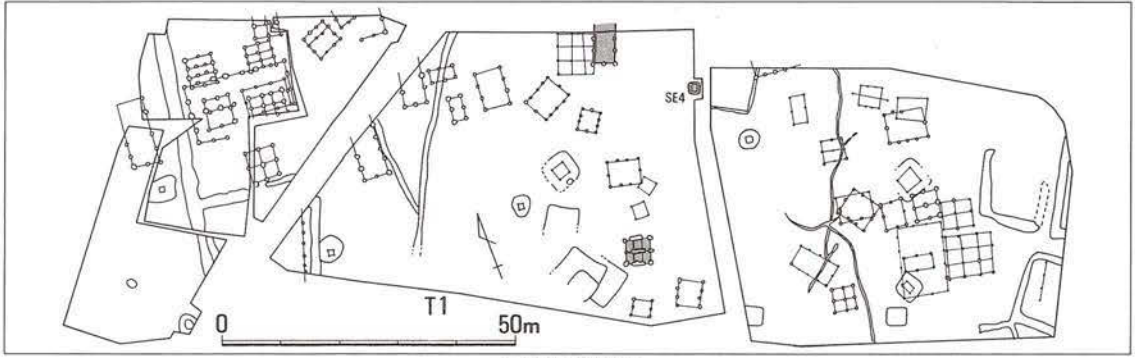
3. 中畑遺跡の概要とガラス埴塼の出土状況

中畑遺跡は草津市矢倉一丁目周辺の瀬田丘陵段丘上に位置し、旧近江国栗太郡に属する。段丘先端には古代東山道・東海道が存在しており、特に、矢倉から追分町にかけての地域で両官道が分岐していたと推測されている。この分岐点にあたる矢倉から追分町付近に中畑遺跡の他、矢倉口遺跡・岡田追分遺跡・南平遺跡等の集落遺跡が存在する。これらの遺跡の中で奈良時代から平安時代についてみてみよう。矢倉口遺跡では掘立柱建物群と共に検出された井戸から奈良時代中頃から後半にかけての木沓が出土、他に皇朝12銭が20枚出土している。特に、昭和60・元年度の調査では鍋鋳型・ふいご羽口・埴塼・とりへの破片が多数出土している。岡田追分遺跡では奈良時代末から平安時代前期の集落跡で掘立柱建物群・柵列・井戸のほか、製鉄遺構が検出されている。一方、南平遺跡では奈良時代から平安時代の集落跡で掘立柱建物・井戸等が検出されている。特に、総柱建物の比率が大きいことが注目される。

中畑遺跡はこれまでの調査によって弥生時代から平安時代にかけての遺跡であることが確認されている。平成2年～3年度におこなった草津川改修事業関係の調査においても30棟を越える掘立柱建物や竪穴住居・井戸・溝等が検出されている。このうちガラス埴塼の出土した遺構は第1トレンチの東隅で検出したSE4で平安時代初頭には廃絶している。この時期に並存する遺構としては、井戸周辺に掘立柱建物2棟がある。1棟は布掘掘形を持つ総柱建物の倉庫である。

SE4の掘形は一辺1.8～2.0mの隅丸方形を呈し、深さ2.1mをはかる。井戸枠は四隅に10cm角の角柱をすえ、この角柱のほぞ孔に5cm角の横柱を通す。これに厚さ4cm、幅15～25cm、長さ0.9～1.0mの横板を重ねる。現状で7段遺存する。埋土は大きく2層に分けることができる。下層は井戸廃絶時に埋め戻した土で、上層はその後の自然堆積層である。井戸内出土遺物にはガラス埴塼のほかに須恵器壺・土師器皿・杯・斎串・ひょうたんの皮（容器？）等がある。これらの遺物は下層の埋め土から主に出土している。ガラス埴塼は壺の下方から発見されたもので、井戸底から約30cm浮いた所に底部を上に向けてやや傾いた状態で出土している。共伴した土師器は精製された粘土を使った畿内産土師器で、奈良時代後半のものである。

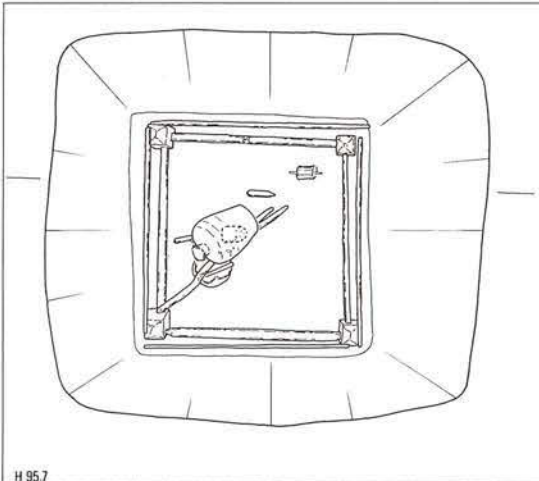
4. 中畑遺跡出土のガラス埴塼の概要



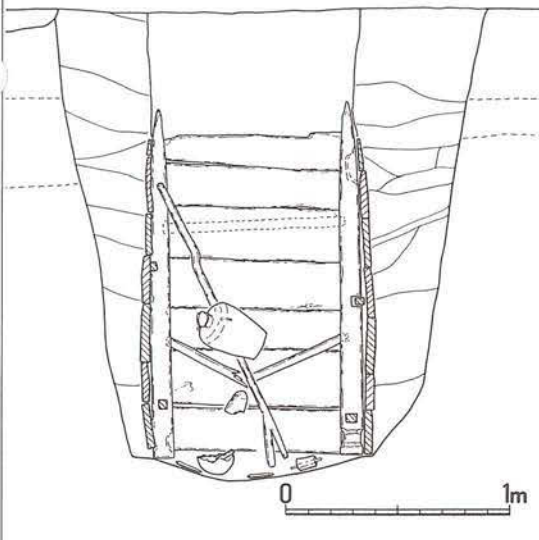
中畑遺跡平面図

ガラスを溶解した坩堝である。高さ13.4cm、口外径9.6cm、口内径8.0cm、深さ10.4cmの砲弾形をしており、底部は丸く作られている。口縁部の刃を欠損する。飛鳥池分類のⅠ類に相当する。壁体は部厚く作られ

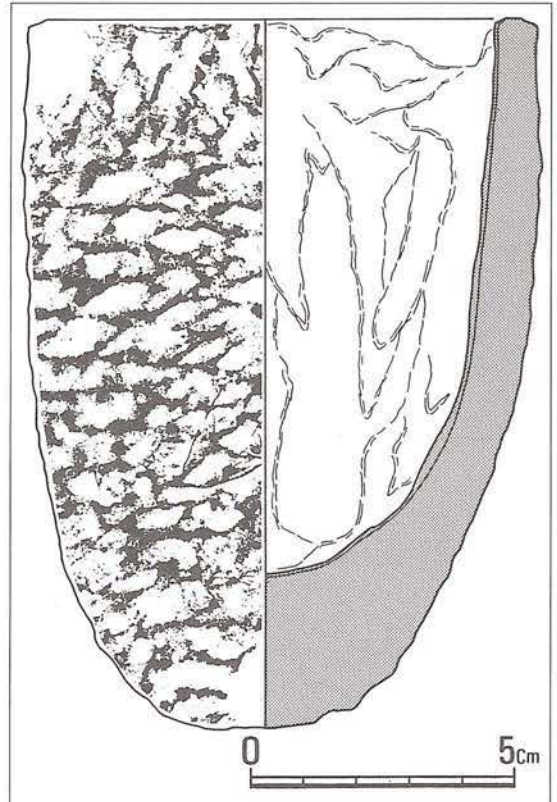
0.85~1.2cm、底部では3.0cmに達する。胎土は大形の石英を大量にふくむ粗い須恵質である。口縁にわずかな沈線がめぐる。おそらく口縁を切断する時に痕跡としてついたものと思われる。外面は粗い斜格子タタキ調整を全面に施しており、被熱のむらが見られる。内面はなめらかな放物線を描き、底部ちかくでわずかに段状を呈している。型作りと考えられる。また、濃緑色のガラス釉がかかり、さらにその上一面に黒銀色釉が流下し、一部には厚く溜っている。このガラス釉は外面にも数条の流れとして底部まで付着している部分もある。また、一部には亀裂のはいった所からガラス



H 95.7



ガラス坩堝出土状況 (SE4)



中畑遺跡出土ガラス坩堝

質がにじみ出ている箇所も見られる。科学分析の結果、鉛ガラスであると判明した。

5. 中畑遺跡出土ガラス埴塼をめぐる諸問題

ここではガラス埴塼に関する問題点を整理し、あわせて中畑遺跡出土例のもつ意味についても検討したい。

ガラス埴塼は、中畑遺跡のほかにもこれまでに9遺跡で確認されている。これらの遺跡は石川県寺家遺跡を除いてはすべて大和での出土である。また、遺跡の性格についてみると都城（藤原京・平城京）・宮殿（石神）・工房（飛鳥池）・祭祀遺跡（寺家）に分類される。このうち都城遺跡出土例も京内工房遺跡が多いことが目につく。寺家遺跡は国家的祭祀色の強い性格が強調されており、祭祀に用いるガラスを製作するために都からガラス工人を呼び寄せたと理解されている。このようにガラス埴塼の出土する遺跡は律令制と極めて関係の深い遺跡であることがわかる。

時期についてみると藤原京例の7世紀後半を最古として飛鳥池遺跡・石神遺跡例の7世紀末～8世紀初頭、平城京・寺家遺跡例の8世紀（奈良時代）に限定されている。

埴塼の胎土はすべて石英を大量にふくむ粗い土で堅致に焼成されており、銅埴塼に比べて極めて丈夫につくられている。おそらくガラスを再加工してガラス製ガラス埴塼出土遺跡地名表

品を作るのと異なり、石英・鉛等の原石からガラスを作るには1,300°C以上の温度が必要となり、この様に堅致なガラス埴塼を作ったものと考えられる。

規格と形態についてみると、飛鳥池遺跡出土例によって大きく3類に分類されたが、各地での出土例は平城京右京八条一坊十三・十四坪のⅢ類を除いて、ほぼ飛鳥池分類Ⅰ類と同規格であることが確認でき、極めて規格性の高い遺物であることがわかる。ただし、飛鳥池分類Ⅱ類は他では確認されていない。

相違点に目を向けると外面タタキ調整と底部整形の2点を指摘することができる。タタキ調整では、飛鳥池遺跡例のタタキの斜格子は細かく、その他の例はやや粗い調整となっている。底部整形では、飛鳥池遺跡例と平城京東堀河例は底部が乳頭状に尖る形態だが、他は丸く整えている。この相違点については年代的な違いに求めることも可能であろうか。

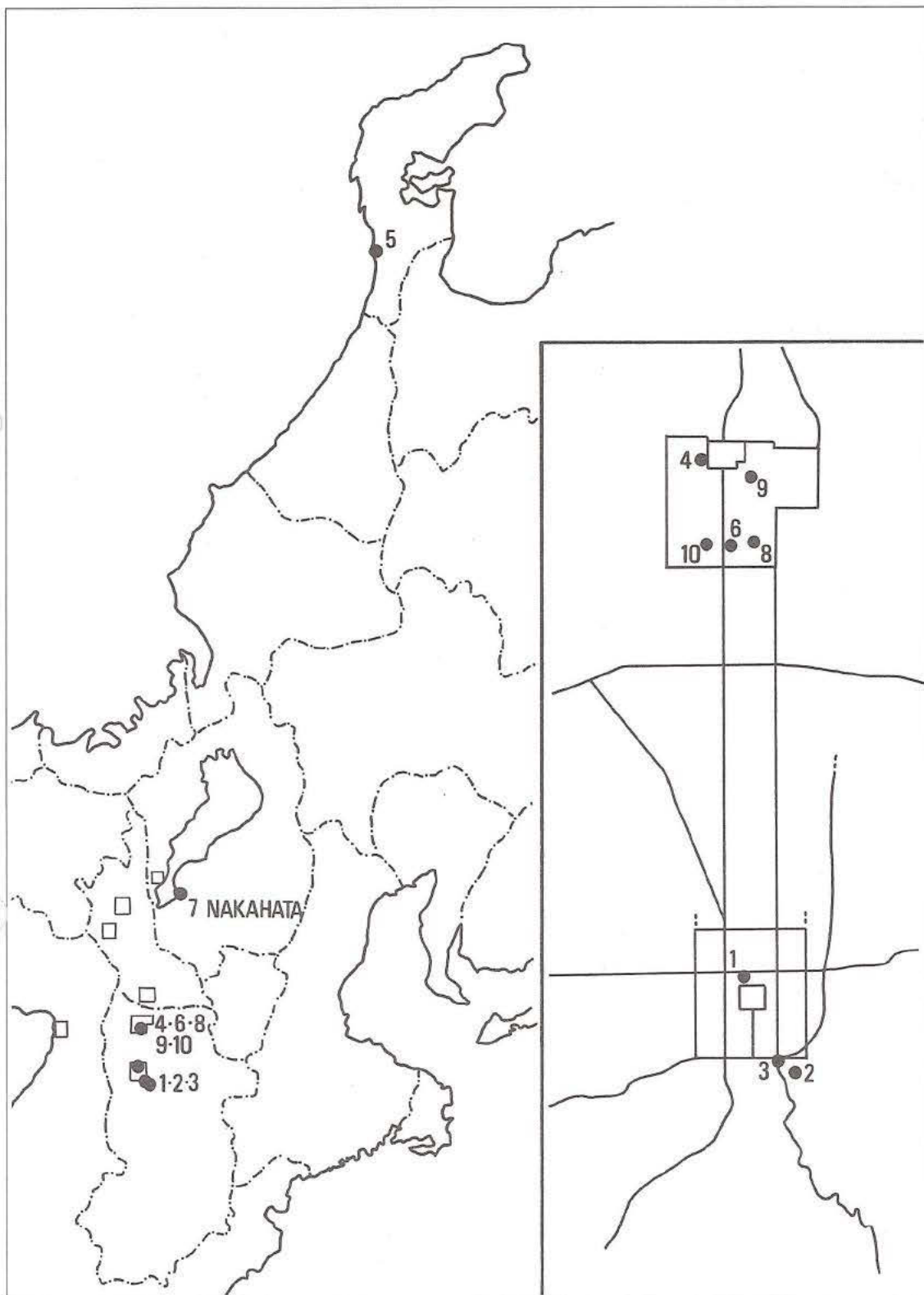
このようにガラス埴塼は極めて規格性の高く、時期的にも遺跡の性格からも律令制度に深く関与している遺物であるといえよう。またタタキ調整と底部形態の相違については時期的な違いである可能性もある。今後の課題である。

では、中畑遺跡出土例はこれらの中でいかなる位置を占めているのであろうか。まず、大和を離れた近江の地でガラス埴塼が発見された意義は大きい。これま

	遺 跡	遺 構	時 期	備 考
1	藤原京右京一条二坊東北坪	S E 7165・S K 7186・包含層	7C後半～8C初	体部片 4点
2	飛鳥池遺跡	包含層	7 C末～8 C初	約90個体・蓋約70個体
3	石神遺跡	大溝・大土坑・包含層	7 C末～8 C初	底・体部 未報告
4	平城京右京二条二坊十六坪	S E 540	奈良時代中頃	1個体
5	寺家遺跡	S B T 28・包含層	奈良時代中頃	底・体部 5点
6	平城京左京八条一坊三坪	S G 3500上層	奈良時代後半	体部片 1点
7	中畑遺跡	S E 4	奈良時代後半	1個体
8	平城京左京八条三坊九坪	S D 1300（東堀河）	奈良時代	底部片 1点
9	平城京左京三条二坊七坪	S D 06	奈良時代	底・体部 2点 未報告
10	平城京右京八条一坊十三・十四坪	S D 1499・S D 1495	奈良時代	底・体部 2点

文献

- 1 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』（1992）
- 2 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』（1992）
- 3 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査概報16・18・20』（1986・1988・1990）
- 4 奈良国立文化財研究所『平城京右京二条二坊十六坪発掘調査概報』（1982）
- 5 石川県立埋蔵文化財センター『寺家遺跡発掘調査報告Ⅱ』（1988）
- 6 奈良国立文化財研究所『平城京左京八条一坊三・六坪発掘調査報告書』（1985）
- 7 未報告
- 8 奈良国立文化財研究所『平城京左京八条三坊発掘調査概報』（1976）
- 9 奈良国立文化財研究所『昭和57年度 平城宮跡発掘調査概報』（1983）
- 10 奈良国立文化財研究所『平城京右京八条一坊十三・十四坪発掘調査報告』（1989）



ガラス埴場出土位置図

で都城遺跡(寺家遺跡を除く)でのみの出土であり、律令体制の中央地域でしか確認されなかったガラス埴塙が、畿内の枠を越えて律令国家の支配する範囲において出土したことは、今後も各地で出土する可能性をもたらしている。また、中畑遺跡では今回ガラス埴塙が出土したことにより当遺跡もしくは周辺でガラス生産をおこなっていたことが明らかとなった。しかし、当遺跡ではこの他には工房関係の遺物は発見されていない。建物配置も規格性があるとはいいがたく、工房や官衙遺跡と認定するには現状では問題がある。それでは中畑遺跡の性格をどう考えるべきであろうか。中畑遺跡周辺には鍋の鋳型・ふいご羽口等の出土している矢倉口遺跡も存在する。さらに目を広げると、野路小野山遺跡、木瓜原遺跡などの生産遺跡群の集中する地域でもある。これらのことを考えあわせると、中畑遺跡においても今後工房関係の遺構・遺物の出土が期待されることである。しかし、これらの遺構・遺物が出土したとしても、必ずしも官営工房と限定する必要はない。正倉院文書にもみえるように工匠を貴族宅に派遣し鋳造等を行う例があることから、官人の邸宅においてガラス生産をおこなうことを考える必要もあろう。平城京右京二条二坊十六坪・平城京左京三条二坊七坪などがこれにあたるのかもしれない。

つづいて、ガラス埴塙そのものについて比較してみると、外面タタキ調整の粗さ・底部が丸いことなど飛鳥池遺跡例よりも平城京例にちかい。このことは奈良時代後半という時期からも問題はなく、これまでの特徴にあげたものの範疇にある。

6. おわりに

今回、草津市中畑遺跡から出土したガラス埴塙の資料紹介とこのガラス埴塙をめぐる問題点の整理を試みた。これらについては、すでに記してきた通りである。奈良県飛鳥池遺跡から大量に出土したことによりその全容が明らかになりつつあるが、中畑遺跡からの出土により大和以外の各地での出土も予想されるようになった。また、これまで性格不明の遺物として扱われていた中にもガラス埴塙が含まれている可能性は高い。ガラス埴塙は小破片であっても、その粗い胎土と内面のガラス質・外面のタタキ調整によって容易に識別することができる。今回の資料紹介から、今後の発掘調査による出土例の増加と既調査での出土遺物の再発見を期待したい。

小稿を作成するにあたり、調査を担当された滋賀県文化財保護協会の平井美典氏より遺跡の概要・出土状況の御教示をいただいた。また、ガラス埴塙については奈良国立文化財研究所の川越俊一・西口寿生・花谷浩氏および飛鳥資料館の岩本圭輔・千田剛道氏より

様々な御教示を得た。ここに記して感謝の意を表したい。なお、筆者がガラス埴塙に興味を持つきっかけになったのは、川越・西口両氏と共に飛鳥池遺跡出土ガラス埴塙の整理に参加する機会があったことによる。小稿の内容もその時の検討結果に導かれるところが大きかったことをここに記しておく。(相原 嘉之)

注

- ① 奈良国立文化財研究所「飛鳥池遺跡の調査」(『飛鳥・藤原宮発掘調査概報22』 1992)
- ② 蓋の役割としては温度調節・混入物の防止などが考えられる。
- ③ 滋賀県教育委員会・草津市教育委員会・滋賀県文化財保護協会『矢倉口遺跡発掘調査報告書』(1987)
- ④ 藤居 朗「井戸掘方より9世紀以前の鍋鋳型出土」(『滋賀文化財だより』No.110 1986)、谷口智樹「奈良時代の官営工房か?」(『滋賀文化財だより』No.147 1990)、滋賀県教育委員会「岡田追分遺跡調査報告」(『昭和50年度滋賀県文化財調査年報』1977)
- ⑤ 草津市教育委員会「南平遺跡」(『市内遺跡分布調査報告書』 1984)
- ⑥ 草津市教育委員会『草津川改修関連遺跡発掘調査概要報告書Ⅰ・Ⅱ』(1986・1988)
- ⑦ 畿内産土師器の定義については林部 均「律令国家と畿内産土師器」(『考古学雑誌』第77巻4号 1992)に従う。
- ⑧ 外面のタタキ調整は口縁から3cmまでとそれより下部ではタタキ方向が異なる。これは側面から底部にかけて斜格子タタキを行った後に、埴塙を反転させ口縁部のタタキ調整を行ったためと考えられる。
- ⑨ 肥塚隆保氏(奈良国立文化財研究所)の分析結果による。
- ⑩ 石川県立埋蔵文化財センター『寺家遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(1988)
- ⑪ S E 7165出土のガラス埴塙は飛鳥Ⅳと同伴している。奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査概報22」(1992)
- ⑫ 肥塚隆保氏によるとガラスの分析から純国産のガラス生産をおこなうようになるのは7世紀後半からという。1992年11月14日に飛鳥資料館にて講演。
- ⑬ 飛鳥池遺跡ではガラスの原料である石英・水晶・方鉛鉱が出土している。
- ⑭ 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会『野路小野山遺跡発掘調査報告書』(1990)
- ⑮ 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会『木瓜原遺跡現地説明会』(1992)
- ⑯ 榎木謙周・栄原永遠男「第2章 技術と政治」(『技術の社会史Ⅰ』 1982)